

國學院大學學術情報リポジトリ

里芋祭の儀礼構成にみる再生のドラマ：
千葉県館山市茂名十二所神社の祭礼

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋野, 淳一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001981

里芋祭の儀礼構成にみる再生のドラマ

―千葉県館山市茂名十二所神社の祭礼―

秋野 淳 一

要旨

『イモと日本人』で著名な民俗学者・坪井洋文の再評価・再検討の機運が高まっているが、神社祭礼における神饌としての里芋について十分に検討されたとはいい難い。そこで、本稿では、「稲作対畑作」といった先人観を一度捨てて、藺田稔の『イモと日本人』の書評の視点、茂木栄の「祭はいかに行われるか」との基本的命題を重視して、祭研究の立場から千葉県館山市茂名の十二所神社の里芋祭を個別具体研究の対象とした。分析にあたっては、祭の実態を明らかにした上で、祭起源伝承から祭構成を検討し、甘酒と里芋がセットで構成されること、当番の引継ぎの場面に親芋を積上げた里芋の山が登場していたことを指摘した。また、坪井が「畑作文化の確認」で取り上げた岡山県と滋賀県の神社祭礼で当屋・当番の引継ぎに里芋が登場する二事例との類似にも言及し、十二所神社の里芋祭で演じられる祭のドラマを明らかにした。

キーワード

坪井洋文、里芋祭、祭起源伝承、当屋祭祀、祭のドラマ

一、はじめに

平成二〇年六月、『イモと日本人』〔坪井 昭和五四年〕、『稲を選んだ日本人』〔坪井 昭和五七年〕などの著書をものし、「餅なし正月」の分析で著名な、民俗学者・坪井洋文（元國學院大學教授・元国立歴史民俗博物館教授）の没後二〇周年を迎えた。俄かに、坪井洋文の再評価・再検討の機運が高まっている。例えば、同年七月、國學院大學では、小川直之を代表として、坪井洋文「島のくらし 50年の変化」と題し、坪井洋文の民俗写真に焦点を当て、坪井の写真の展示とシンポジウムが開催された（小川・他 平成二〇年）。また、平成二二年二月に刊行された『季刊東北学』では、「坪井洋文・再考」と題した特集が生まれ、赤坂憲雄・佐々木高明・小川直之による座談会「坪井民俗学をどう受け継ぐか」で、畑作文化論・フィールドワーク・民俗写真の観点から議論がなされている（赤坂・他 平成二二年）。但し、これらの

シンポジウムと座談会では、神社祭礼における神饌としてのイモの問題が、残念ながら中心的なテーマとはならなかった。一方、平成二二年七月に國學院大學で開催された、國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター主催の「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」（中間成果公開シンポジウム）では、センター長の相山林繼が「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」と題して基調講演された。そのレジュメの中で、「柳田國男の「食物習俗語彙」をはじめとする習俗語彙の出版や、かつての日本文化研究所でも、坪井洋文をはじめとする面々の調査研究があった。坪井の「イモと日本人」などの日本民族の成立に関わる問題も、食物、神饌に連なっている。」として、「神社祭礼に見るモノと心」グループの研究課題として、イモの問題・坪井洋文の再検討の課題が提起された。

では、具体的にどのような視点から、神社祭礼における神饌としてのイモの問題、それに関連して坪井洋文の研究の再検討を行う必要があるのだろうか

か。

そこで、参考となるのは、宗教学者・蘭田稔の『イモと日本人』の書評である。蘭田は、「民俗学と経験科学 坪井洋文著『イモと日本人―民俗文化論の課題』をめぐって」の中で、『イモと日本人』の読み方について、「単一文化の条件」柳田国男の農耕文化論「畑作儀礼研究の計画」餅なし正月の背景―イモと日本人（一）―「イモと餅の象徴―イモと日本人（二）―「畑作文化の確認―イモと日本人（三）―」の本論六編について、全編を逆に読み進めた方がよい点を指摘し、「ともかくこの「畑作文化の確認」を読んで初めて著者の方法論にもとづく畑作儀礼の研究が今後の民俗文化論に大切なことが率直に理解できる。今後の民俗宗教の研究にとって、これは大きな収穫である。」と評価している。しかし、本論の他の二編、即ち「餅なし正月の背景」「イモと餅の象徴」は、「実証面で未完成的の感を免れない。」としている（蘭田 昭和五五年 一四頁）。つまり、六編目の「畑作文化の確認」での個別具体研究による問題発見をベースとして、全国的事例との比較検討へ展開する方法論を改めて示唆してくれる。この「畑作文化の確認」の初出は、『祭祀研究集成』に収録された祭研究であった（坪井 昭和五二年）。一方で、坪井洋文の畑作文化論・「餅なし正月」の分析には、民俗学の立場から、「稲作対畑作」といった視点ではなく、「複合生業論」を主張する安室知の批判がある（安室 平成一年）。

こうした研究動向から、一度、「稲作文化」の対立軸としての「畑作文化」といった先入観を捨て、イモを神饌とする祭の研究という立場から、いわば「畑作文化の確認」をし直す必要がある。そこで、茂木栄が指摘するように、「祭研究にとって、「祭はいかに行われるか」という基本的命題が最も重要である。」（茂木 平成五年 六四頁）との視点から、千葉県館山市茂名の十二所神社の里芋祭（通称「茂名の里芋祭」）を個別具体的に検討し、祭祀源伝承と祭構成の関わり、坪井の研究事例との類似にも触れながら、神饌としての里芋の位置づけと、里芋祭で演じられる祭のドラマについて解明したいと思

う。

なお、本稿では、神社祭礼の研究という立場から、通称の「茂名の里芋祭」ではなく、「十二所神社の里芋祭」という呼称を採用した。

二、茂名十二所神社の概観と里芋祭の研究史

まず、本論に入る前に、千葉県館山市茂名の十二所神社の概観と、主な十二所神社の里芋祭（茂名の里芋祭）の研究史について見ておきたい。



【写真1】十二所神社（平成21年、筆者撮影）

（一）十二所神社と里芋祭の概観

千葉県館山市茂名は、館山市南西部に位置する神戸地区にあり、安房国一宮・安房神社に近く、延喜式内社（論社）・洲宮神社の鎮座する洲宮の集落に隣接した内陸部の山村である。海は持たないが、集落の中程を南北に川が流れ、途中、洲宮川と合流して平砂浦で太平洋に注ぐ。この茂名の氏神鎮守として十二所神社がある。『千葉県神社名鑑』によると、十二所神社の祭神は国常立尊で、氏子数は二五戸とある。また、社伝によると、養老二年五月の草創で、往昔は葦加比神社と称したが、天正元年に本村の戸数が一二戸と

なつて十二尊宮と称するようになった。後世社号を改め、十二尊神社または十二所神社と称したという〔千葉県神社名鑑刊行委員会 昭和六二年 八〇三頁〕。この十二所神社の二月二〇日の例祭に、山型に積上げた里芋を一对、当番宅から神社へ奉ることから、「里芋祭」と呼ばれる。里芋祭は、例祭前日の一九日に、当番宅で里芋を山型に積み上げる。二〇日午前、積上げた里芋の山を当番宅から十二所神社へ奉り、神社での祭典後、里芋の山は崩され、各戸に配られる。午後、当番宅で「当渡し（トワタシ）」と呼ぶ当番の引継ぎを行う。かつては「オビシヤ」といって、当番宅に里芋の山を一六山奉った後、当渡しを行つた。翌・二一日、午前中、祭典の片付けを行い、午後、「オビシヤゴモリ」と称して、当番宅で女性だけでオコモリを行う。現在、「茂名の里芋祭」は国指定重要無形民俗文化財となり、近年ではテレビ撮影やアマチュアカメラマンが例祭当日に訪れる。

（二）里芋祭の研究史

本節では、十二所神社の里芋祭の研究史を発表年代順に概観したいと思う。中嶋清一は、「さといもまつり 館山市・十二所神社」で、里芋祭の祭起源伝承と、里芋祭の概観を簡潔に紹介しているが、二一日のオビシヤゴモリについての記述はない〔中嶋 昭和六三年〕。

萩原左人は、「安房の里芋祭りとその周辺」で、茂名の概観・生産暦・年中行事・祭組織など茂名の民俗の中に里芋祭を位置付け、中嶋の報告を踏まえた里芋祭の祭起源伝承の分析、現在の祭構成と、以前の祭構成（二月二〇日の十二所神社の祭典、二一日の当番宅でのオビシヤ、二二日のオビシヤゴモリ）との比較を初めて明らかにしている〔萩原 平成二年〕。

山本志乃は、「イモを繋いで生きる―茂名・里芋祭の諸要素―」で、茂名の里芋祭を一つの社会伝承として捉え、里芋祭の継承が、茂名というムラの継承そのものを反映している点を指摘している〔山本 平成四年〕。

田村勇は、「茂名の里芋祭り再考」で、三日間の祭の詳細を明らかにして

いる。特に、当番から神社までの行列の順番、十二所神社の祭典での玉串奉奠の順番、二一日のオビシヤゴモリにおける「高砂子音頭」「伊勢音頭」の詳細を初めて報告している。そして、前掲の萩原・山本の研究を踏まえた上で、依然として里芋が神事の主役を担うという継承力と茂名の人々の結束力の強さの裏側には、館山城との関係性という歴史的条件と、水田を開くには困難な茂名の環境の中で保持された食文化が里芋祭の継承の大きな要因であるとしている〔田村 平成六年〕。

庄司民江は、「里芋祭り見聞記」で、里芋祭の祭起源伝承や祭りの概観を記録した上で、一九日夜の里芋積みがこの祭全体の山場であると分析している〔庄司 平成一〇年〕。しかし、二〇日の当番宅での当渡し（トワタシ）については報告されていない。

山本志乃は、前掲論文に続き、「館山市茂名の里芋祭り」で、祭起源伝承、三日間の祭の概観を簡潔にまとめている〔山本 平成一四年〕。

文化庁文化財部監修の『月刊文化財』（四九八号）に「茂名の里芋祭」が取り上げられ、祭起源伝承、祭の詳細などが簡潔に報告されている〔文化庁文化財部 平成一七年〕。

千葉県伝統文化伝承事業実行委員会（事務局・館山市教育委員会生涯学習課）がDVD『茂名の歳時記「里芋祭り」』を製作し、その「解説書」は、「第一章 集落の概要」「第二章 村のしくみ」「第三章 生産暦」「第四章 年中行事」「第五章 茂名の里芋祭について」「第六章 里芋に関する儀礼について」の構成で、茂名の里芋祭を多角的に明らかにしている〔茂名の里芋祭り映像記録作成委員会 平成一八年〕。第一章では、山本志乃が、現在の地勢と茂名の集落の概観を明らかにした上で、文化八年（一八一二）の「茂名村絵図」と現在の比較、十二所神社と村の由来について触れている。第二章では、田村勇が、村の組織の観点から、里芋祭りの組織、その他の茂名に伝わる民俗宗教の組織を、第三章では、田村勇が、茂名の稲作・麦作の生産暦、里芋に關しては野菜の生産暦に位置付けている。第四章では、榎美香が、茂名の村

次元と家次元の年中行事について明らかにしている。第五章では、山本志乃が、里芋祭の変化、祭起源伝承、祭の組織、三日間の祭の実際、文化財の指定について明らかにしている。第六章では、小島孝夫が、全国的な視点から里芋に関する儀礼を分析した上で、農耕儀礼研究において、稲作文化と畑作文化を対立的に捉えるのではなく、複合的存在として捉えるべきことを指摘している。

秋野淳一は拙稿「十二所神社 里芋祭」で、里芋祭の概観、祭起源伝承と出産との関連、祭構成の変化、祭のドラマを指摘している〔秋野 平成二一年〕。

このように、十二所神社の里芋祭は、民俗学の立場から多くの研究がなされ、坪井の『イモと日本人』のように、稲作文化に對立する畑作文化という視点からではなく、小島の研究のように、「複合的存在として里芋祭を捉える視点」、山本や田村の研究のように、「茂名の集落の社会的位置付けから里芋祭を捉える視点」が主流となってきたといえる。しかし、萩原の研究以降、祭のドラマを説明する上で重要な祭起源伝承と祭構成についての検討が十分になされたとは言い難い。そこで、平成二一年二月一九日～二二日の里芋祭の実際を報告した上で、祭構成の中に神饌としての里芋を位置付けて分析を試みたいと思う。

三、里芋祭の実際

(一) 当番宅での里芋積み

十二所神社・例祭前日の二月一九日。その年の積番の家が里芋（親芋）を蒸かして、一六個ずつ当番宅に持ち寄る。積番とは、茂名の集落二七軒を一三組（十一軒だけの一組）に分けて、二軒一組で「積番仲間」を組み（平成二二年現在）、各組は、積番と受番の二軒で構成し、一年交替で里芋を蒸かして当番宅に持っていく積番となる。里芋を当番宅へ持っていかない年は受

番になる。つまり、今年、積番となって里芋を出した家は、来年は受番となり里芋を出さない。但し、平成二一年の当番宅のように、当番と積番を同時に担当する場合もある。

当番宅に積番が持ち寄る里芋（親芋）は、前年の一〇月末頃に収穫して、畑の近くに藁やビニール（マルチ）を被せて、霜に当たって腐らないように保存する。昔は、茂名の「砂山」に穴を掘って「イケた（蓄蔵した）」という。そして、祭に先立って掘り出し、カビの付いた里芋は竹べらできれいに取ってから、一鍋に何個も入らないので、三、四回に分けて蒸かす。蒸かした里芋は夕方までに、当番宅に届ける。届けられた里芋は、神棚と仏壇が祀られたザシキ（座敷）の床の間の前に、木箱などに入れて置かれていた。床の間には、「十二所神社」と書かれた掛軸が掲げられている。当番宅には、一六個×一三組＋一軒だけの組で二〇〇個以上の里芋が持ち寄られた計算になる。里芋を積み際、大きさや丸さなどがぴたりと収まらない場合があるので、少し多めに用意される。里芋は山型に一对積み上げられるが、一山で六〇～七〇個ぐらいになるという。現在は、二山（一对）だけであるが、かつては一六山ぐらいあったという。

一八時半に集合、一九時から里芋積みとの予定のため、一八時半が近くと当番の家の親戚、来年の当番となる受番の家の男たちが「おめでとうございます」と当番の戸主に挨拶をしながら、続々と集合してくる。

一八時五〇分頃、ザシキ（座敷）とオク（奥）の部屋に青いシートを敷き、里芋積みの準備を始める。一九時、シートの上に、館山市役所で用意してもらった赤萩の枝・約二〇〇本の芽（凸凹）の部分ナイフで削って平らにする。芽を削った後、六〇cmぐらいの長さにし、里芋に挿す際は太い方から挿しこむという。赤萩の枝は、昔は各家で近くから取ってきたが、今は城山公園に群生している赤萩を館山市役所にお願ひして送ってもらっている。削り終わると、赤萩の枝はひとまとめにされ、一度シートの上を掃除する。

一九時半頃、シートの上に里芋を載せる飯櫃（メシツギ）と呼ばれる丸い

台を二つ用意して二手に分かれ、それぞれ底から里芋を積んでいく。飯櫃の下には風呂敷を敷いておく。飯櫃の大きさは、昔と変わらないという。里芋を積み始める際、一番底に入れる里芋は「丸いのがいい」「おっぱいみたいに丸いのがいい」といって、慎重に形を選びながら積んでいく。赤萩の枝を里芋に挿して、枝の長い部分は切断して固定しながら、山型に積み上げていく。ここで残った里芋は十二所神社の祭典へ持っていく。この里芋積みの場には女性は一切立ち入ってはいけないという。



【写真2】当番宅の里芋の山（平成21年、筆者撮影）

左側の山が「雌」、右側の山が「雄」。御神酒の他、山の前には、鯛(左)・お供え餅(中)・のし餅(右)を供える。

二〇時一〇分頃、一対の里芋の山が完成すると、飯櫃の下に敷かれた風呂敷を二人で持って、一山ずつ床の間の前に移す。床の間の前に移されると、各々の里芋の山の頂上に梅の花を挿す。完成した一対の里芋の山は、必ずどちらかが雄と雌になるという。平成二十一年は、床の間に向けて左側が雌で、右側が雄であるという。また、里芋の山の前には、御神酒・お供え餅・のし餅・鯛二尾を供える。神社まで運ぶ際に使う竹籠も用意される。この間、オ

ク(奥)には料理が用意され、宴となる。

(二) 十二所神社での祭典

二月二〇日、十二所神社の例祭・当日。九時半に当番宅から一対の里芋の山を担いで出発し、茂名区民館を経由して十二所神社まで行列し、一〇時から神社で祭典を行う予定であったが、平成二十一年は折からの大雨と強風のため、行列をするのは神社入口から神社までとなり、後は車に乗せて運ばれた。

九時前、床の間の前に奉った一対の里芋の山の前には、御神酒・お供え餅・のし餅・鯛二尾の他に、カラナマスが供えられていた。九時、竹籠の中に里芋の山を入れ、周りに新聞紙を詰め、雨のため上からビニール袋を被せる。

九時半、天秤棒で竹籠に入った里芋の山を一山ずつ担いで、玄関を出るが、大雨と強風のため、別棟に一旦運び、そこでワゴン車に積み込まれる。その他の床の間の前に供えた神饌も運び出され、車に積み込まれる。車は途中、茂名区民館で甘酒を降ろして、神社入口まで移動する。区民館で降ろされた甘酒は、神社の祭典の後、区民館で催される来客への直会で振舞われる。

一〇時一五分頃、神社の入口から強風に煽られながら、十二所神社まで行列する。神職を先頭に、当番が持った「お供え餅」、天秤棒で担がれた里芋の山(一対)、鯛とカラナマス、後ろに「のし餅」の順で行列し、神社の鳥居までの山道を登っていく。鳥居を潜り、階段を上って十二所神社の拝殿に里芋の山を運びこむ。神前に向って、左右に一山ずつ里芋の山を奉る。また、神前に、夏みかん・鯛二尾・御神酒・塩と水・お供え餅・大根と人参などの野菜・十二所神社御札・里芋(親芋と子芋)・のし餅・カラナマスを供える。

一〇時半過ぎ、大雨の影響があり、予定より遅れて十二所神社において神職による祭典が始まる。神前に向って左側に来客・里芋積みに携わった当番・受番などの関係者が座り、右側には茂名区民代表が座る。祭典は型通りのものであるが、玉串奉奠の順番は、①氏子総代、②茂名区長、③農家組合長、④オビシヤ当番、⑤オビシヤ受番、⑥館山市議会議員、⑦房南中学校校長、

⑧神戸小学校校長、⑨大田区立館山ささなみ学校校長、⑩J A神戸支店長、⑪建設会社、⑫区民代表の順に行う。祭事が終わると、氏子総代が挨拶をして、翌日の片付けの時間などが告げられ、祭典が終了する。



【写真3】神社に奉った里芋の山
(平成21年、筆者撮影)

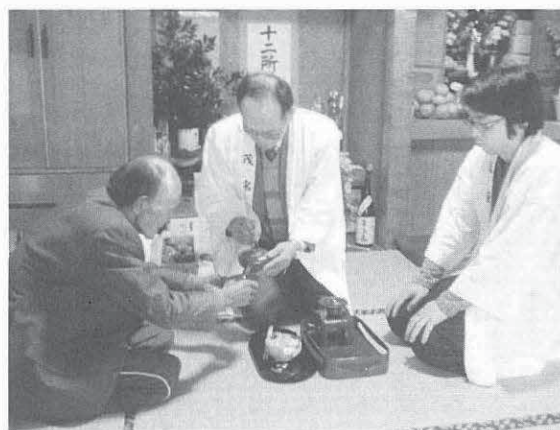
一一時一〇分頃、当番の親戚・受番によって、神前に向って左側で、里芋の山が崩し始められ、また神前に供えた、のし餅は切って切餅にする。崩した里芋（親芋）・六個、切餅・一切、十二所神社の御札・一枚を一セットとして、二七軒分を用意し、茂名の各戸に配る。区民代表は、里芋の山を崩す作業や、のし餅を切る作業に参加せず、神前に向って右側で、御神酒と、神前に供えたカラナマスで直会を行う。来客は、氏子総代らと茂名区民館で直会となり、当番の家でも神社から戻ると、仕出し屋から出前をした膳と日本酒で宴となる。

なお、神社の祭典には、女性の立ち入りが禁じられている。

(三) 当番宅での当渡し (トワタシ)

二〇日午後、氏子総代が茂名区民館での来客との直会がひと段落してから、当番宅のザシキ（座敷）で、氏子総代立会いのもと、本年の当番から、来年

の当番である受番に「当渡し」（当番の引継ぎ）を行う。床の間に向って、中央に氏子総代、左に当番、右に受番が座り、間に御神酒の盃とカラナマスが置かれる。一四時一五分頃、まず、当番が氏子総代から盃に御神酒を頂いて飲み、続いて、氏子総代がカラナマスを一箸取り、当番はこれを手で受けて食べる。次に、受番が氏子総代から、当番が使った同じ盃で御神酒を頂いて飲み、続いて氏子総代がカラナマスを一箸取り、受番はこれを手で受けて食べる。これで当渡しは終了する。時間にして、わずか一、二分のことである。



【写真4】当番宅での当渡し（平成21年、筆者撮影）

左が当番、中央が氏子総代、右が受番（来年の当番）。
写真は氏子総代から当番が御神酒を受ける場面。

(四) 当番宅でのオビシャゴモリ (女性のオコモリ)

二一日午前、神社で幟の後片付けや掃除などを行う。そして、午後から当番の家で女性だけでオコモリを行う。これを「オビシャゴモリ」と呼ぶ。一三時前、女性たちが連れ立って当番宅に向う。この日は、一六軒が当番宅に集るが、通常であれば茂名の全戸から女性が一人ずつ参加するという。しかし、不幸のあった家は参加できない。オビシャゴモリも、当番の家のザシキ

(座敷)とオク(奥)を使って行う。一三時、女性たちが集ると、まず当番宅の戸主が挨拶をする。そして、大根の入ったカラナマス、煮しめ(里芋、焼き豆腐、大根、人参、牛蒡・竹の子・昆布など)、紅白饅頭などの料理が出される。煮しめには、里芋と焼き豆腐が必ず入るといふ。飲み物には、ビール、ワイン、ジュース、お茶などが出される。料理が揃うと、乾杯となる。一三時五四分頃、「高砂踊」を三人の女性が舞う。「高砂踊」を一振りでもやらないと、宴会ができないとか、オコモリが過ぎないといわれ、約二分間舞



【写真5】当番宅での「高砂踊」(平成21年、筆者撮影)

茂名では、この「高砂踊」をオビシャゴモリの他、子どもの出産後に行うイナコウジンのオコモリでも舞った。

われた。やがて、お碗一杯の甘酒が出され、最後にお茶が出される。甘酒が出るまでは帰れないといふ、お茶は「おんだしだ」といって、お茶が出ると帰らなくてははいけないといふ。お茶が出され、一五時二〇分頃に皆で揃って帰宅となった。オビシャゴモリが終わると、里芋祭も終了する。オビシャゴモリは本来、①当番の戸主の挨拶、②高砂踊(必ず宴会の前)、③料理が出されて乾杯、④唄などを歌う、⑤甘酒を出す、⑥お茶を出す、といった順で行ったという。

【表1】里芋祭の祭起源伝承

伝承	祭起源伝承の内容	子ども	甘酒	里芋	出典
1	国常立尊(くにとこたちのみこと)には、十一人の子どもがあったが、お妃の母乳が十分でなかったため子どもたちに、甘酒とさといもを与えて育てた。その結果、子どもたちはかぜひとつひかずにみな無事に成人したといわれる。	11	○	○	〔中嶋 昭和六三年 九四頁〕
2	ここの神様には12人の子どもがいたって。それで十二所神社という。神様はお乳が出なくて、里芋と甘酒を乳変わりに飲ませて子供を育てた。そいで昔から里芋と甘酒をお供えてお祭りをやっているって。	12	○	○	〔萩原 平成二年 八七～八八頁〕
3	ここの神さんには十二天様といって12人の子がいて、神さんチョコ(母乳)が出なくて、甘酒を飲ませて育てたと。だからお祭りよばれた人には甘酒を出したよ。	12	○	×	〔萩原 平成二年 八八頁〕
4	伝承によるとこの国常立尊という神様は十一人の子宝に恵まれたけれど、乳が出なかったので甘酒と里芋の蒸したものを母乳の代わりにして、子供たちを丈夫に育てたと伝える。	11	○	○	〔田村 平成六年 四頁〕
5	国常立尊には十二人の子どもがあったが、お妃の母乳が十分でなかった。そのため甘酒と蒸した里芋をすりつぶし、それを母乳のかわりに与えた。子どもたちは風邪ひとつひかず健やかに育ったという。	12	○	○	〔庄司 平成一〇年 一〇頁〕
6	十二所神社の祭神には十二人の子供があったが、乳の出が悪く、里芋でこれを育てた。	12	×	○	〔山本 平成一四年 一四三頁〕
7	国常立尊は一人の子宝に恵まれたが、後の母乳が十分に出なかったため、その代わりに蒸かした里芋と甘酒を与えて子どもたちを丈夫に育てあげたというものである。	11	○	○	〔文化庁文化財部 平成一七年 九頁〕
8	祭神である国常立尊に12人の子どもがあったが、妃の乳の出が悪く、甘酒と里芋でこれを育てた。	12	○	○	〔茂名の里芋祭り映像記録作成委員会 平成一八年 二三頁〕
9	昔、十二所神社の神さまには12人の子どもがいたが、乳の出が悪く里芋と甘酒で子どもを育てた。	12	○	○	〔秋野 平成二一年 五頁〕

(二) 祭起源伝承における甘酒と里芋

四、十二所神社の里芋祭の分析

平成二十一年九月現在、十二所神社の里芋祭についての祭祀源伝承について伺うと、「十二所神社の神さまは子沢山で、乳が出ないのでイモと甘酒で育てた」とか、「十二所神社の神さまは、乳の出が悪かったので里芋と甘酒で育てた」とか、「子どもが二人いて乳も足りないのので甘酒と里芋で育てた」といった伝承を聞くことができる。しかし、これまでの里芋祭の研究には、表1から、子どもの数が「二人」とする伝承が六例、「一人」とする伝承が三例ある。萩原左人は、表1の【1】の伝承と、萩原自身が調査した【2】の伝承を比較して、甘酒と里芋を供えるという点で共通しているが、祭神の性別や子どもの人数に違いが見られる点を指摘している。また、【2】と【3】の伝承を比較して、【3】の場合は里芋の要素が欠けて、甘酒のみの説明になっている点も指摘している〔萩原 平成二年 八七〜八八頁〕。ただ、全体としては【3】と【6】の伝承を除き、いずれの祭祀源伝承でも、子どもの人数の違いはあっても、「甘酒」と「里芋」で「子どもを育てた」という点は共通しているといえる。つまり、甘酒と里芋がセットであることが里芋祭にとって重要であるといえる。

【3】の甘酒のみの伝承について、「お祭りよばれた人には甘酒を出してたよ」というところが注目される。現在では行われなくなったが、かつては当番宅で作られた甘酒は大樽に入れられて、青年団によって当番宅から十二所神社まで運ばれ、神社祭典の後、近くの分教場（小学四年生までが通学）の小学生によって、神社入口で参列者に振舞われたという。この記憶と【3】の伝承は密接に関わっていると考えられる。特に、【3】の話者は女性であったから、神社の祭典に参加できず、「よばれた人」という表現になっているといえる。また、【3】の伝承は、神社には里芋の山を供えず、甘酒が振舞われた記憶を持つ方の伝承だとも考えられる。逆に、【6】の里芋のみの伝承であるが、これは、神社入口での甘酒の振舞いが消滅し、神社祭典へ里芋の山を奉るようになった後の祭構成を反映している伝承といえる。他方、子

どもの人数に関しては、十二所神社は、二人の神々から構成され、親神を一人とすると、子どもは、12-1-11で、「一人」とする解釈がある一方で、単に「二人」とするものと二通りがあるといえるが、ここでは数の相違が重要な要素とは考えられない。

（二）祭構成における甘酒と里芋

では、なぜ祭祀源伝承において、甘酒と里芋がセットで語られるのか、祭構成との関連で検討したい。

まず、甘酒であるが、かつて茂名の山中の高い場所にあったオビシヤ田で、天水（雨水）だけで育て収穫された米で作られた。その後、オビシヤ田が作られなくなり、当番宅の水田から収穫された米を館山市内の麴屋に頼んで粉にして作るようになり、現在では市販のものに変化している。祭構成から見ると、甘酒の振舞いは、二〇日の神社祭典の後という点では変化はないが、小学生による神社入口での参列者への振舞いから、茂名区民館での来客への振舞いに変化した。また、二二日から二一日へ祭日が変化したオビシヤゴモリでも、「甘酒が出るまでは帰れない」というほど、甘酒は重要な構成要素であり続けている。

次に、里芋であるが、昔は、茂名芋を砂山の畑に植えて、秋に収穫して砂山の畑の脇、水の来ない方に穴を深めに掘って藁を被せて、里芋の親芋を「イケた（蓄蔵した）」。

子芋は、食用や種芋にした。戦後、セレベス（里芋の品種）が日本に入ってきて、真夏と早魃に弱い茂名芋から変化した。しかし、祭があるので、里芋だけではどうしても作らないといけないという。祭に先立って、穴から掘り出して蒸かすことに変化はないが、祭構成は、二〇日夜の各積番宅での里芋積み、二一日の当番宅でのオビシヤに奉る構成から、一九日夜の当番宅での里芋積みと二〇日の神社祭典への奉納に変化し、里芋の山の数も一六山から二山（一对）に変化した。また、里芋の分配であるが、オビシヤ後の積番宅での分配から、神社祭典後の分配に変化しているが、里芋（親

芋)が分配されることに変化はない。この里芋を食べると、「風邪を引かない」とか、「子宝に恵まれる」という〔文化庁文化財部 平成一七年 一〇頁〕。しかし、かつての茂名芋の親芋は、ほくほくして美味しかったが、セレベスの親芋は食べられたものではないという。親芋を食べるのは、この里芋祭の際であった。

このように、甘酒と里芋が祭構成の中で重要な位置を占めていることがわかる。特に、当番を主体に見ると、祭構成は変化しても、当番宅で甘酒を作ることや里芋の山を奉ること、また当番と同時に積番を行うのであれば、里芋を蒸かして供出することに変化はない。つまり、祭構成は変化しても、当番宅を基軸に祭の中で甘酒と里芋が出現し続けるのは、里芋祭にとって、依然として甘酒と里芋が重要な構成要素であるからといえる。だからこそ、祭起源伝承に、甘酒と里芋がセットで語られるといえる。

(三) 当番の引継ぎ・共同体の再生の場面の里芋

萩原の研究によると、昭和一七―一八年前、二〇日の神社祭典の夜に、各組の積番宅で里芋の山を一山作り、積番宅の床の間に供えた。そして、二日の夜明けとともに、各組の積番と受番は、里芋の山を一山ずつ積番宅から二人で竹籠に入れて担ぎ、先着順に上座から座するため急いで当番宅へ里芋の山を運び、オビシヤの席には里芋の山が一六山揃った。そして、各組の積番と受番が里芋の山を挟んで、向かい合って座った。その席で、今年の当番と来年の当番との盃時による当番の引継ぎが行われた。二日の昼過ぎまで宴会を行った後、里芋の山を各組の積番宅に持ち帰り、そこで里芋を分配した〔萩原 平成二年 九三頁〕。ここからは、かつての当番の引継ぎの場面に、里芋の山が登場していたことがわかる。おそらく村次元の当番の引継ぎと同じに、各組における今年の積番から来年の積番(受番)への引継ぎも兼ねていて、里芋の山を媒介としたオビシヤでの当番と積番の引継ぎによって、茂名のムラ全体も新しく生まれ変わったといえる。それは、現在でも、一九日

の当番宅での里芋積みの際、「積上げると、必ずどちらかが雄と雌になる」といわれることに通底する。ここでは、里芋が子芋ではなく親芋であることも関係する。即ち、親芋を積上げた里芋の山を男女になぞらえて、「一対」として、祭の当事者が捉えているということは、新たな子芋の誕生と里芋の豊穡の予祝という意味だけでなく、親芋で構成された里芋の山には、新しい共同体の命の誕生を行うシンボルとしての位置づけがなされているといえる。それは、茂名の人たちにとって、当番になるのは、約三〇年に一回で一生に一回限りのことであり、二回行うのは、「元々、子どもがいらない」とか「子どもが死んだ」とか不幸だとされた観念にもつながる。つまり、当番を引継ぐことは、親から子へ「家そのものの命」を継承する意味合いがあったのではなからうか。少なくとも、一生に一回当番を終えると、次に同じ家が当番になった時には、子どもの世代という形で、里芋祭とともに家も継承されていくこととなる。また、里芋の山を崩して分配された親芋を食べると、「子宝に恵まれる」との伝承は、親芋と出産との関連が暗示される。

(四) 里芋祭と出産・子どもの成長

十二所神社には、戦前、氏子総代が持ち回りで管理した、二人の髪を切らない「おかっぱ頭」のような髪型をした子どもが親神さまの肩に乗った絵が描かれた掛軸があったという。この掛軸の子どものように、茂名では、「お宮参り」前の子どもは髪を切らないという〔秋野 平成二年〕。ここからは、十二所神社の神話的世界と、人間の子どもの成長との関係性が伺える。こうした出産・子どもの成長との関わりは、女性だけで行うオビシヤゴモリの席で舞った「高砂踊」が、女性だけで出産後に茂名の成願寺(現在は茂名区民館)で行うイナコウジンのオコモリでも必ず舞われた。それも出産前ではなく、無事に生れたお礼に、出産後に行う「ハタシ」の席で舞ったことから裏付けられる。つまり、かつての祭構成からいえば、オビシヤの席上での当番の引継ぎ後、共同体が再生し、新たな命が誕生した後、オビシヤゴモリの

席で、それを祝って、「高砂踊」が舞われたことになる。しかも、里芋の山を競って早く運び上座を取るという各組同士の対抗関係、オビシャの席上での当番と受番、積番と受番との対抗関係を経て、新しい命が誕生したといえる。それが、正に、祭起源伝承の「里芋と甘酒で子どもを育てた」との語り表象されている。

(五) 坪井洋文の「畑作文化の確認」の事例との類似

坪井洋文は「畑作文化の確認」で、岡山県新見市大字千屋小字代城の倉島神社の当屋祭と、滋賀県東浅井郡浅井町野瀬の下之森神社の当番の引継ぎ行事を事例に、当屋・当番の引継ぎの場面に里芋が登場することを明らかにしている。倉島神社の事例では、旧暦九月一九日に、当屋の家で作った甘酒は本殿に供えて祭典を行った後に振舞い、同じく当屋の畑で収穫された芋茎・里芋は本殿には供えず、当屋の引継ぎの場面の儀礼食として登場する。坪井もこのことに注目し、「本殿に供えるのはゴクウとゴスイのみというように、餅と甘酒だけである。」と述べている〔坪井 昭和五四年 一三四頁〕。十二所神社の里芋祭も、以前は餅を供えて神社祭典を行った後、甘酒を振舞った点、当番の引継ぎの場面に里芋の山が登場した点、坪井が指摘するように、当屋祭に女性の参加を認めず、山の神との関連が暗示される点も類似している。下之森神社の事例では、一月六日の当番の引継ぎ行事に、両当番組が拝殿に対座し、細長い麻稈に三・五・七個の数に刺して茹でた里芋が出され、受ける当番に一人ごとに配られ、扇子や懐紙で受けた後、冷酒を一人ずつ注ぐ。こうして、当番の引継ぎを行い、引継ぎ後に里芋の串刺しを肴に冷酒を飲む〔坪井 昭和五四年 二五八頁〕。この二つの事例から、当屋・当番の引継ぎの場面に里芋が登場し、十二所神社の里芋祭もこれらの宮座祭祀の同一線上にあるといえる。

五、おわりに

このように、十二所神社の里芋祭について、祭研究の立場から見えたが、祭を一つのドラマとして捉えようと、以下のようになる。前年の秋に収穫した里芋（親芋）を、「砂山」の畑の脇に穴を掘って蓄蔵し、祭に先立って、「籠り」の期間を終えた里芋を掘り出してきて蒸かし、現在では、当番宅で山型に積上げる。この親芋で作られた里芋の山は、「一对」で男女の姿と観念され、戦前は当番宅での当番と積番の引継ぎの場面であるオビシャに一六山揃った。そこで、奉つて分配された里芋（親芋）は、子芋の誕生と豊穣を予祝するだけでなく、茂名の村落共同体の再生、親から子への「家そのものの継承」、出産と子どもの成長を表す「命のシンボル」として出現した。これは、野本寛一がいう里芋の「籠りと再生」に当たる〔野本 平成二〇年 三二七頁〕。しかし、里芋祭を構成する重要な神饌には、甘酒もある。かつては、オビシャ田から収穫された米で当番が甘酒を作り、十二所神社での祭典後、参列者に振舞った。また、女性だけで行う当番宅でのオビシャゴモリでも甘酒を飲まないで帰ることができなかった。つまり、十二所神社の里芋祭は、「十二所神社の神さまは、乳の出が悪かったので里芋と甘酒で子どもを育てた」という祭起源伝承の再現に他ならず、里芋と甘酒を媒介に、祭構成は変化しても、十二所神社と当番宅を儀礼的空間として、共同体の再生と新たな命の誕生のドラマを、祭を通じて演じてきたといえる。

こうした祭のドラマを見ることによって、「稲作対畑作」といった次元を超えて、その土地の個性・風土にあった多様な日本文化を再確認できるのではなからうか。坪井の「畑作文化の確認」の再検討へのささやかな試論である。

なお、現地調査では、山田眞一氏、石井武蔵・千加子御夫妻、山口守氏をはじめとした多くの茂名区の方々にお世話になった。心より御礼申し上げる。

- (1) 祭起源伝承と祭構成の連関について、茂木栄「祭伝承の結集と源流―南信濃遠山谷―」『まつり伝承論』(茂木 平成五年)の研究がある。
- (2) 蘭田稔は、「さて祭礼は、いうまでもなく集団の総合的な儀礼表現である。しかも総合儀礼であるからには、全体としての意味のコンテキスト(文脈)があり、物語り性がある、その意味ではシナリオ(脚本)に沿うドラマに比すべく、一種のソシオ・ドラマ(社会劇)ともいえよう。とりわけ日本の祭礼は、少なくとも現行の各地伝統の行事に関するかぎり、かならずしも明確に自覚された理念や信条の儀礼的表現であるよりも、地域住民の日常を離脱せしめる共同の儀礼体験の反復という性格が強いだけに、ことの真偽や歴史の虚実にはさほどこだわらずに、土地の神話や伝承をテキストにして執行される祭礼が多い。その観点からすれば、日常とは別の現実をめざして劇場で上演を繰り返す演劇にむしろ近いといえよう。」(蘭田 平成一七年 九〇―九一頁)と、日本の祭を一つのソシオ・ドラマ(社会劇)として捉えている。
- (3) 萩原法子によれば、オビシャとは、年頭に行われる弓行事の一種であるが、単にオビシャと称し、オトウ渡しを中心にして、的うちは行わない所が圧倒的に多いとしている(萩原 平成一一年 二七九頁)。里芋祭のオビシャも当番の引継ぎが中心にある。
- (4) 各組の「受番」を、「アイテバン」とする研究(山本 平成四年)(山本 平成一四年)もある。

参考文献

赤坂憲雄・佐々木高明・小川直之「座談会 坪井民俗学をどう受け継ぐか」『季刊東北学』第一八号、東北芸術工科大学東北文化研究センター、平成二二年。
 秋野淳一「十二所神社 里芋祭」『神饌』(神々を彩るモノシリーズ2)、茂木貞純・他、國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター、平成二二年、五頁。
 小川直之・須永敬・藤井弘章・長野隆之「島のくらし 50年の変化―坪井洋文撮影民俗写真から―」國學院大學文学部・小川直之、平成二〇年。
 庄司民江「里芋祭り見聞記」『館山と文化財』第三十一号、館山市文化財保護協会、平

成一〇年、一〇―一二頁。

蘭田稔「民俗学と経験科学 坪井洋文著『イモと日本人―民俗文化論の課題』をめぐって」『國學院大學日本文化研究所報』第九五号、國學院大學日本文化研究所、昭和五五年、一一―一四頁。
 蘭田稔「祭礼文化における伝統と現代」『文化としての神道』弘文堂、平成一七年、八六―九二頁。
 田村勇「茂名の里芋祭り再考」『千葉県立安房博物館研究紀要』(vol.1) 千葉県立安房博物館、平成六年、四―一〇頁。
 千葉県神社名鑑刊行委員会編『千葉県神社名鑑』千葉県神社庁、昭和六二年。
 坪井洋文「イモと日本人」未来社、昭和五四年。
 坪井洋文「稲を選んだ日本人」未来社、昭和五七年。
 坪井洋文「総説 祭りの地域的諸形態―祭り研究における農耕文化史的視点の定立―」『祭祀研究集成』第五卷、三隅治雄・坪井洋文編、名著出版、昭和五二年。
 中嶋清一「さといもまつり 館山市・十二所神社」『房総の祭り』うらべ書房、昭和六三年、九四―九五頁。
 野本寛一「生態と民俗」講談社学術文庫、平成二〇年。
 萩原左人「安房の里芋祭りとその周辺」『千葉県立房総のむら年報』4、千葉県立房総のむら、平成二年、八五―九六頁。
 萩原法子「おびしゃ」『日本民俗大辞典』上巻、吉川弘文館、平成一一年、二七九頁。
 文化庁文化財部監修「茂名の里芋祭」『月刊文化財』四九八号、第一法規、平成一七年、九―一〇頁。
 茂木栄「まつり伝承論」大明堂、平成五年。
 茂名の里芋祭り映像記録作成委員会編『DVD「茂名の歳時記―里芋祭り―」解説書』千葉県伝統文化伝承事業実行委員会、平成一八年。
 安室知「餅と日本人」雄山閣、平成一一年。
 山本志乃「イモを繋いで生きる―茂名・里芋祭の諸要素―」『館山市立博物館報』第三九号、館山市立博物館、平成四年、二頁。
 山本志乃「館山市茂名の里芋祭り」『千葉県祭り・行事報告書』千葉県立大利根博物館編、千葉県教育委員会、平成一四年、一四三―一四五頁。